

## 1. 利用機会について（参考資料 2-1、2-2）

施策	<p>(全) 五湖 web ページの開設、旅行会社等への周知活動等を通じ、新制度の周知を集中的に実施。</p> <p>(全) 高架木道、五湖F H等の園地整備を実施。H26 には駐車場の拡張工事を実施。</p> <p>(植) H24 より開園から 5 月 9 日までを植生期として運用。</p> <p>(ヒ) 利用適正化計画を改定。制度導入時は、同時滞在数の制限など、ツアー枠の自由度が低かったため、H25 に社会実験、H26（第 2 期）から規制を緩和し、利用可能人数を拡大（300 人⇒500 人）。</p> <p>(ヒ) H26 より小ルートツアーを開始し、H27 から本格運用。</p> <p>(ヒ) 事前予約制を補完するため、H24 より知床ガイド協議会が当日受付カウンターを設置。</p>
評価と課題	<p>(全) 制度開始以降、五湖の来園者数はおよそ 40 万人弱で安定的に推移。来園者の明確な減少は確認されていない（<b>図 1-1</b>）。一方、利用者の 75%が高架木道（のみ）の利用者と推定されており、利用形態は大きく変化した。</p> <p>(全) 駐車場の拡張により、渋滞発生時間は緩和（<b>図 1-2</b>）。7 月～10 月の総渋滞時間は 227 時間（H23）から 107 時間（H27）に半減。</p> <p>(全) H27 の 1 日あたり遊歩道立入者数の最大値はヒグマ期が 360 人、植生期が 1942 人となり、いずれも利用可能人数にはまだ余裕がある。</p> <p>(ヒ) 規制緩和の効果もあり、ヒグマ期のツアー参加者数は年々増加。制度開始時の 2 倍の利用数となっている（<b>図 1-3</b>）。小ルートは補助的な位置づけとして機能。ツアー参加者の 1 割強が小ルート利用者。</p> <p>(植) 植生保護期の地上歩道利用者数は 55,000 人前後で推移。ヒグマの大量出没が発生した H24 年は歩道閉鎖の影響により、落ち込んだ（<b>図 1-4</b>）。</p>
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 高架木道が中心となっている利用形態の評価。地上歩道の利用機会、利用者数は、安全面、引率者数、利用者評価等を勘案しながらの評価が必要。</li> <li>○ 団体利用や外国人、ガイドツアーなど多様な利用ニーズへの対応のあり方。</li> </ul>

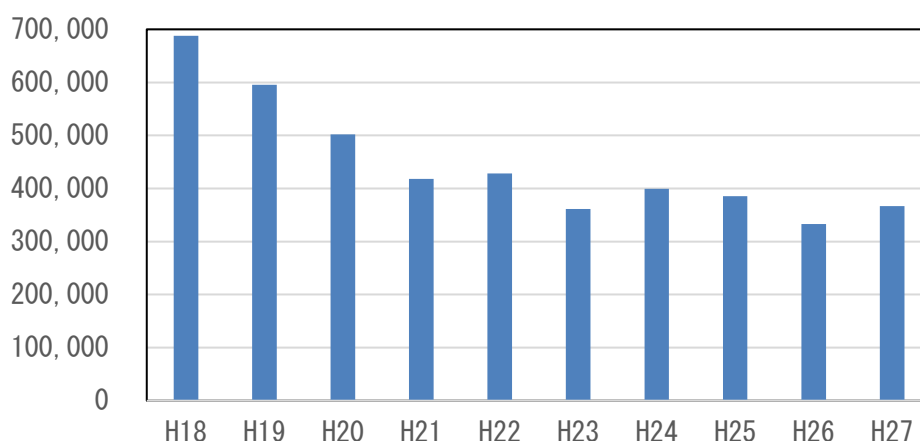


図 1-1 知床五湖園地の来園者数の推移 (人)

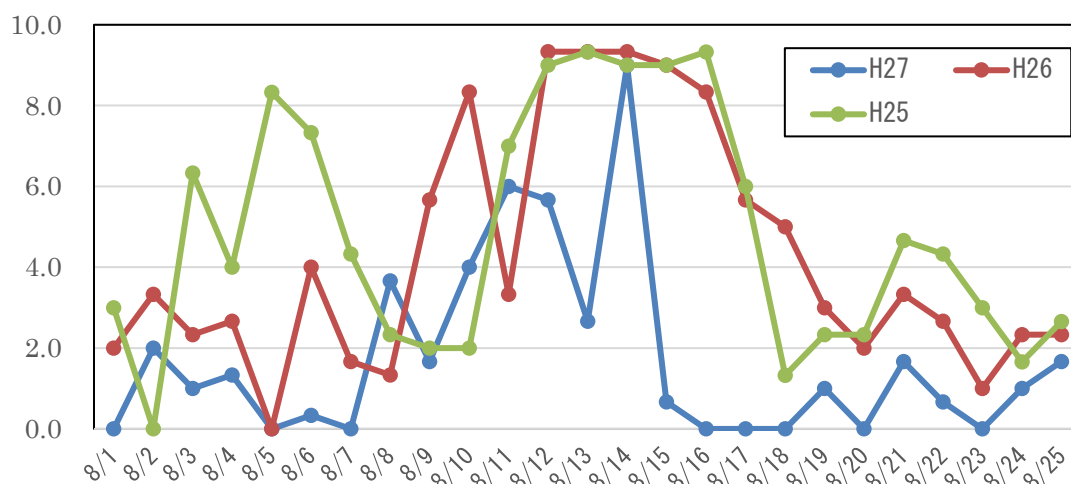


図 1-2 知床五湖駐車場における渋滞発生時間（8月）

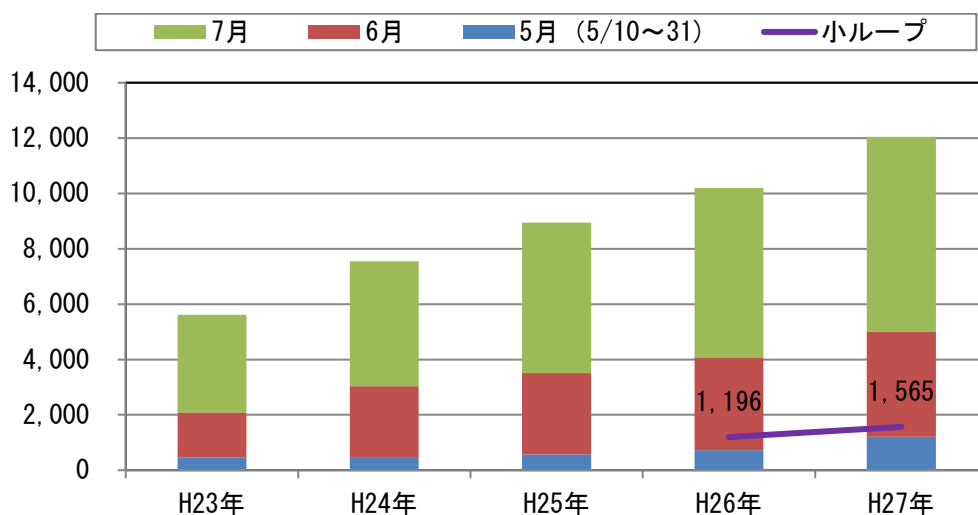


図 1-3 ヒグマ活動期におけるツアー参加者数の推移（人）

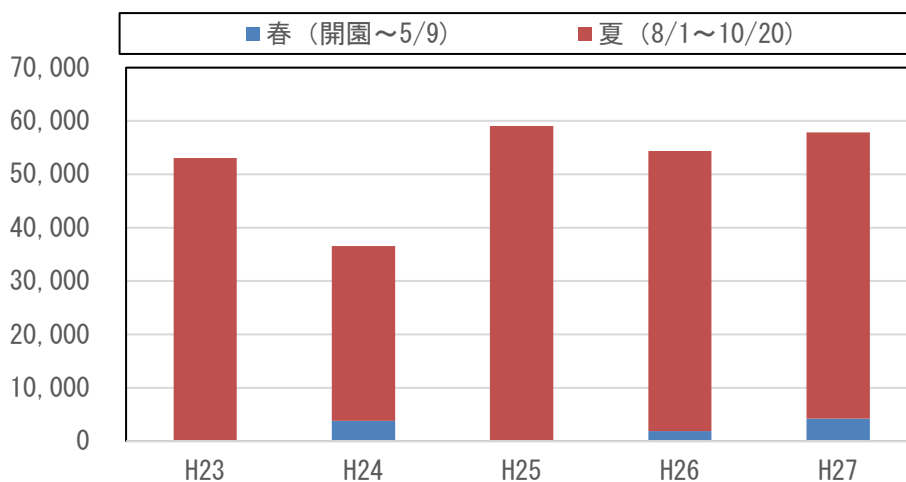




図 1-4 植生保護期における認定者数の推移（人）

2. 安全対策（参考資料 2-3）

施策	<p>(全) 地上遊歩道の立ち入りにあたっては、すべての利用者がレクチャーを受ける体制が整備。五湖F Hに知床財団スタッフが常駐することで、ヒグマ出没時にも迅速な対応が可能となった。</p> <p>(ヒ) ヒグマ期においては、登録引率者の同行により安全対策が強化。H25 からは、ツアー続行・中止を登録引率者が一義的に判断することとなった。同時に安全管理に関する責任の所在が明確化した。</p> <p>(ヒ) H25 より、「事故リスクマニュアル」を整備。事故発生時の連絡調整・情報共有のあり方が明確化。</p>
結果と課題	<p>(全) ヒグマによる重大なトラブル事案は発生しておらず、制度がヒグマに対する安全対策に一定の役割を果たした。</p> <p>(全) ツアー参加者の傷病等を原因としたトラブルは複数発生しており、件数も増加傾向（ 2-1）。</p> <p>(全) F Hを中心としたレクチャーと情報共有のしくみにより、遊歩道の開閉や安全パトロール等に関わる管理コストは減少。</p> <p>(ヒ) ツアーの中止件数は減少傾向にあり、結果的に複数ツアーの連続遭遇等、制度開始時には想定していない事例も発生（ 2-2）。</p> <p>(植) レクチャーによる情報提供により、利用者の行動が変化。ヒグマ出没時の誘導や調査がスムーズになり、結果的に長期的な閉鎖はほとんどなくなった。レクチャーの効果は、五湖地区以外へも波及しており、知床全体のマナーや安全対策の向上に寄与。</p>
検討ポイント	<p>(全) 今後のレクチャーによる情報提供のあり方。実施内容や外国人対策、実施場所など。</p> <p>(ヒ) 事故発生時のリスクヘッジの確立。トラブル発生時の互助体制や救援体制の確立。具体的な事例を想定したトレーニング等スキルアップのあり方。</p> <p>(ヒ) 無線による情報共有や中止による全員退出、出発時間の制限など、安全にかかわる基本ルールの評価。</p>

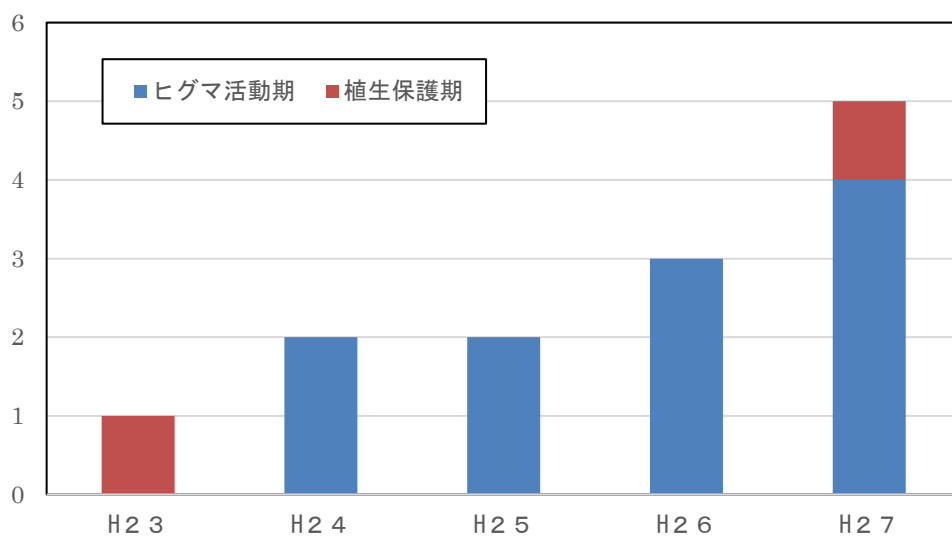


図 2-1 地上遊歩道での傷病トラブル等発生件数

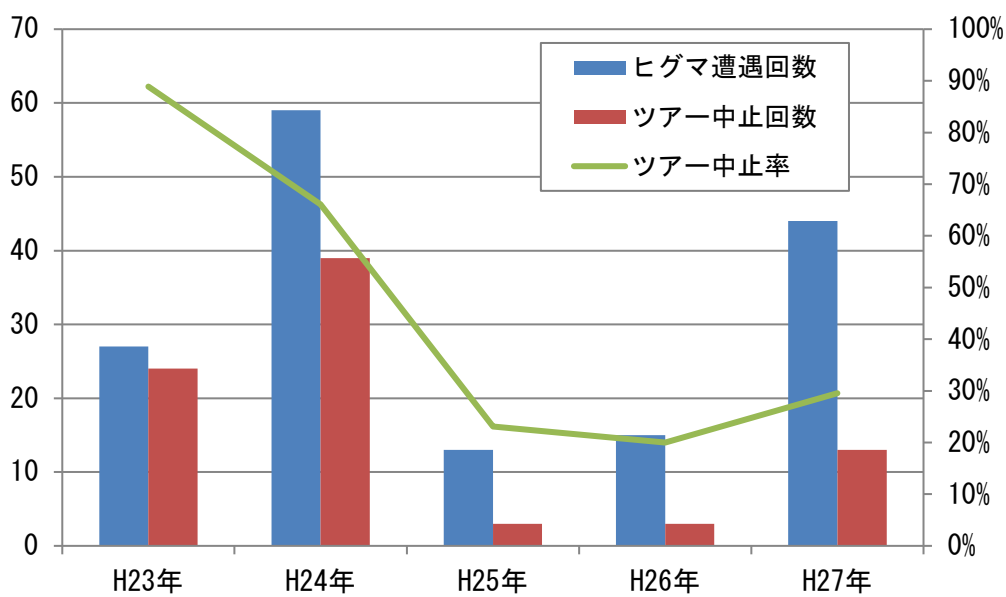


図 2-2 ヒグマ活動期ガイドツアー中の遭遇件数と中止回数

## 3. 利用者評価

施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ H22 以降、H26 まで毎年アンケート調査を実施。ヒグマ活動期におけるツアー参加者を対象としたアンケート調査は継続して実施。</li> <li>○ ツアー参加者については、web アンケートも H24 以降継続して実施。五湖 web サイト上で感想の公開も実施。</li> </ul>
結果と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 制度の認知については、ヒグマ活動期ツアー参加者が最も高く、約 6 割が「知床に来る前から知っていた」と回答した。ヒグマ活動期の高架木道の利用者が最も低く、3 割程度で推移(図 3-1)。</li> <li>○ 制度の支持態度は、ヒグマ期ツアー参加者において上昇傾向。「大変望ましい」とする回答が 2011 年と比較して 20 ポイント以上増加 (図 3-2)。</li> <li>○ 満足感を示す「知床の自然を満喫できたか」の問いに対して、ヒグマ期ツアー参加者の評価が上昇。最高の評価である「とてもそう思う」の割合が 8 割を超えた。一方、ヒグマ期ツアー非参加者の評価は低下傾向で 3 割を下回った。植生保護期の利用者は 4 割で横ばい (図 3-3)。</li> <li>○ 再訪意志などの総合的な評価については、いずれの利用者層も 8 割程度が肯定的。</li> <li>○ 利用者の属性については、いずれの属性においても道内利用者が減少傾向。</li> <li>● 外国人などの利用者意識、制度周知については十分な情報が得られていない。</li> <li>● 費用負担や規制を回避するため、五湖地区を訪問しなかった利用者についての情報は不十分。</li> <li>● ヒグマ活動期のツアー参加者については、5 年間で約 3000 のサンプルが蓄積しており、ツアーの満足度や評価について経年的な検討が可能。植生保護期・ヒグマ活動期のツアー非参加者については、2012 年以降のデータはない。</li> </ul>
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 来園者の 7 割、ヒグマ活動期においては 9 割を占める高架木道利用者の満足度や体験のバリエーション、質向上についての検討が必要。</li> <li>○ 外国人などを含めた今後の意識調査のあり方。</li> </ul>

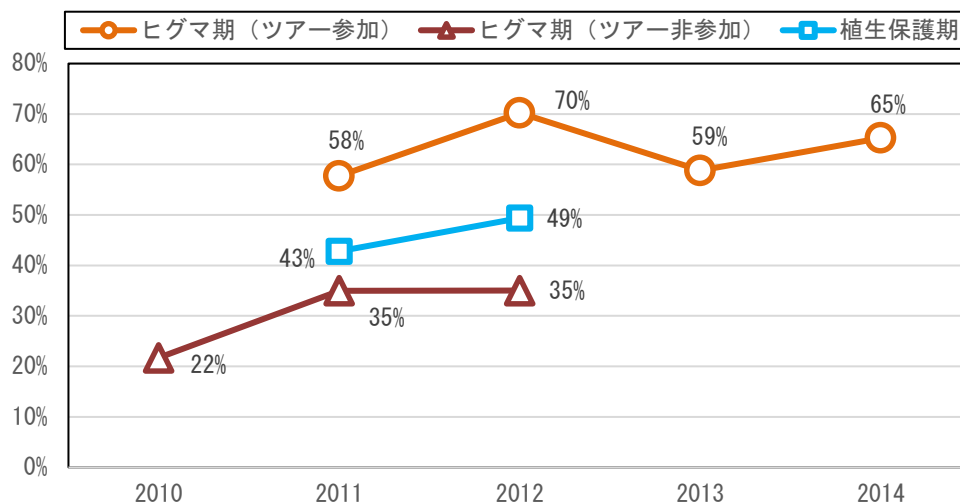


図 3-1 制度を「知床に来る前から知っていた」と答えた割合

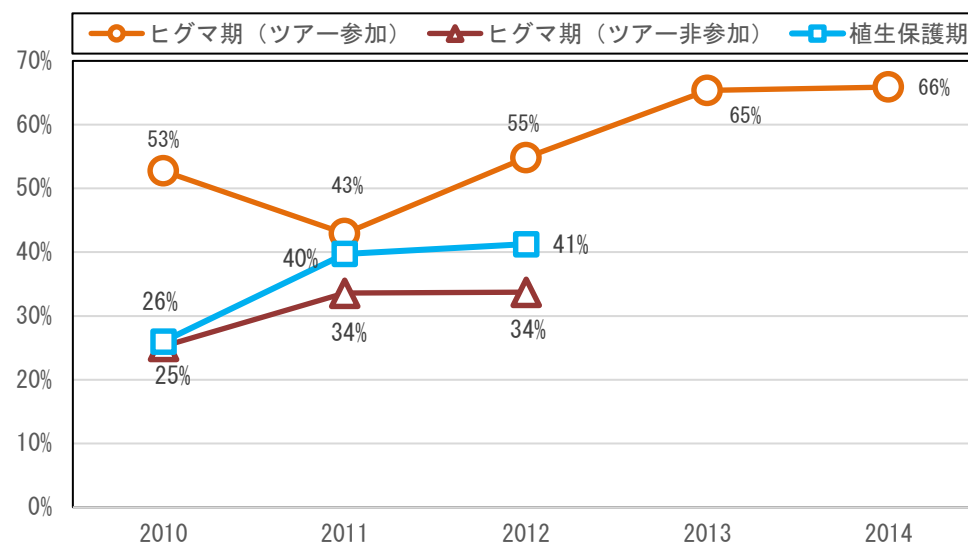


図 3-2 制度の支持態度

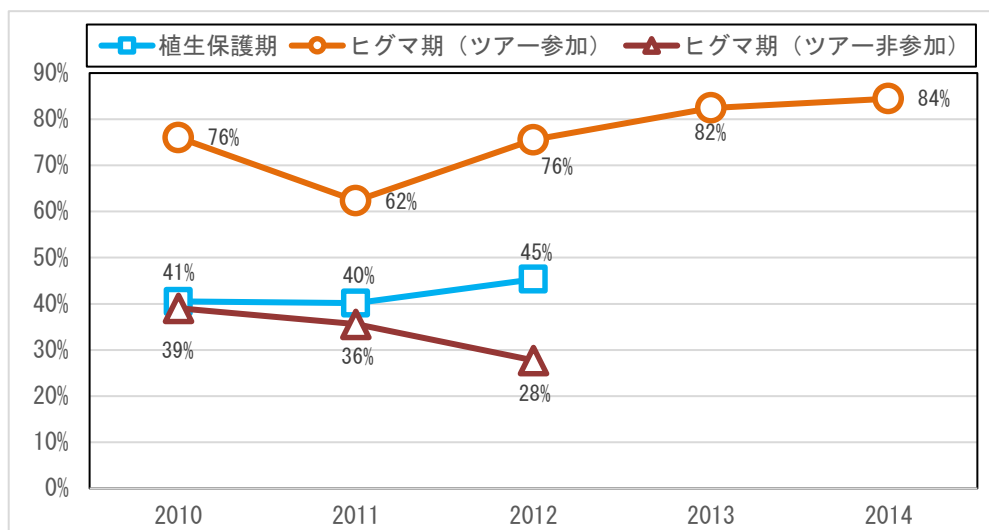




図 3-3 知床の自然を満喫できたか（満足度）

## 4. 利用期の設定について（参考資料 2-3）

施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ H24より開園から5月9日までを植生期とし、それ以降「ヒグマ期」「植生期」「自由利用期」の3つの期分けで制度を運用。</li> <li>○ 利用調整を行う期間は、ヒグマの出没状況を踏まえ3年ごとに見直しを検討することとなっており、第2期改定（H26）においては年変動が大きいことからヒグマの活動状況を記録の上、一定の傾向を把握し改定の要否を検討することとした。</li> </ul>
結果と課題	<p>(ヒ) ヒグマ活動期において長期的な遊歩道の閉鎖は発生しておらず、特にヒグマの出没の多い年や時期において、安全確保と利用機会の確保に貢献した。</p> <p>(植) 植生期においてもヒグマによる事故・トラブルは発生しておらず、レクチャーによる安全確保の仕組みは有効に機能。</p> <p>(全) 過去5年間の出没件数は年変動が大きく、明確な増減傾向は確認できない。年毎の目撃件数は公園全体の出没傾向とほぼ連動しており、H24、27は大量出没が発生している。</p> <p>(全) 5月下旬から6月上旬の遭遇件数は少なく、植生保護期以下の年もある。一方で、8月上旬まで出没が継続する年もあり「ヒグマ出没の多寡」のみでの判断は難しい。自由利用期においてもヒグマの出没は継続しており、利用者等への合理的な説明は難しい。</p> <p>(全) 5月上旬は積雪状況の変動も大きく、残雪の影響を考慮する必要がある。</p> <p>(全) 2度の植生期にヒグマ期が挟まれており、シーズン中に4つの利用期が存在する。分かりづらく、対外的な説明・広報が難しい。</p>
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ヒグマの出没傾向や行動は今後も変化すると考えられ予測は困難。「ヒグマの活動状況に即した期間設定」という基本方針や期間設定に係るその他の要因について評価が必要。</li> <li>○ 「制度のわかりやすさ」や「説明のしやすさ」といった観点からの評価も必要。</li> <li>○ 審査部会ではヒグマ活動期の拡大や利用期の統一について意見が出されたが、公園全体への影響を考えた議論が必要。</li> </ul>

5. 登録引率者の養成と研修（ヒグマ活動期）

施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 制度導入以降、毎年登録引率者の募集と養成研修を実施。</li> <li>○ H24 にカリキュラムの見直しと養成研修の担い手を整理。審査部会事務局と知床ガイド協議会、知床財団との分担・協力による研修実施体制へ移行。</li> <li>○ H26 末から新規養成者の募集強化を実施。</li> <li>○ H26 には、英語研修などガイド技術向上のための自主研修も実施。</li> </ul>
結果・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 登録引率者の総数としては、微増傾向。年齢層は 40 代が中心（ 5-1, 5-3）。</li> <li>○ 毎年平均 5 名程度の新規応募があり、研修・試験を経て 4 名程度が登録されている（ 5-2）。転居、転職等により活動を辞める引率者も毎年おり、新規養成者と拮抗している状態。</li> <li>○ 養成研修の開催や進捗管理、試験の実施については、相応の運用コストが必要。</li> <li>○ 引率者資格の要件は、ヒグマの遭遇回避技術。</li> <li>○ ガイダンスの能力や外国語等のスキルを養成するカリキュラムではなく、引率者の質を担保することは困難。</li> </ul>
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 利用者の増加、制度の長期的・安定的な運用、引率者間での公正な競争の確保といった観点から引率者の養成のあり方、目標数についての検討。</li> <li>○ 引率者に求められるスキルや質といった観点から養成やカリキュラムのあり方の検討。特に、ヒグマ遭遇時の判断基準を明示できるか。</li> <li>○ 対象者の検討。地域的にも広い間口とし、多様な層の参画を求めるか、限定的な専門者を対象とするか。</li> <li>○ 自然ガイド育成やエコツーリズム推進の観点と登録引率者の資格の位置づけ。地域のガイド養成やスキルアップとの連携。</li> </ul>



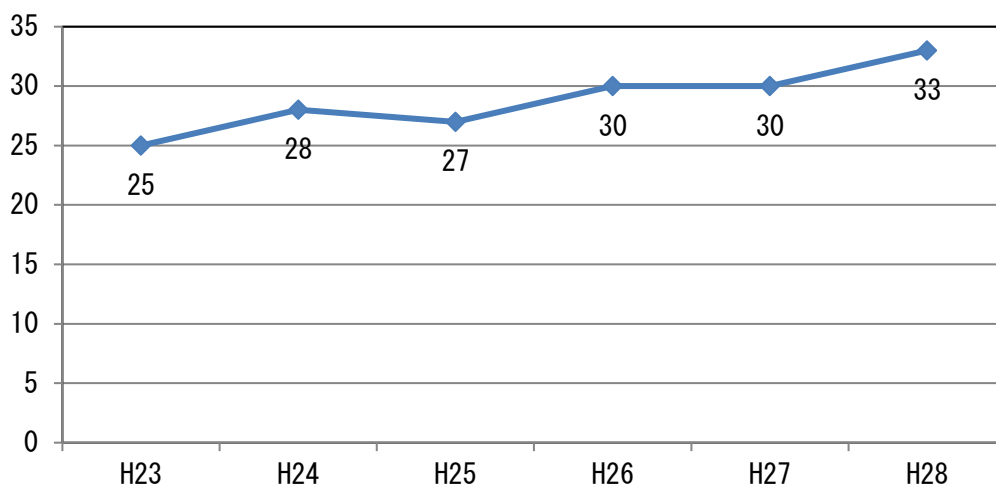


図 5-1 登録引率者の登録数の推移

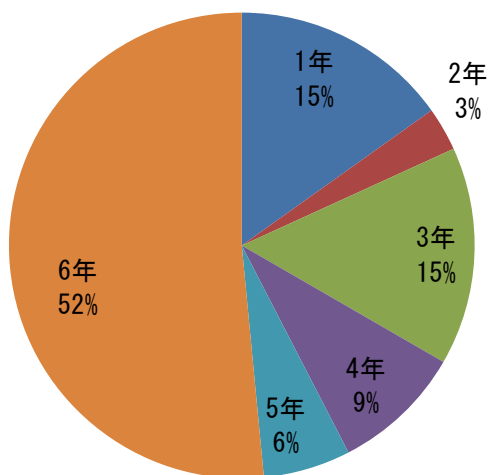


図 5-2 登録引率者の経験年数

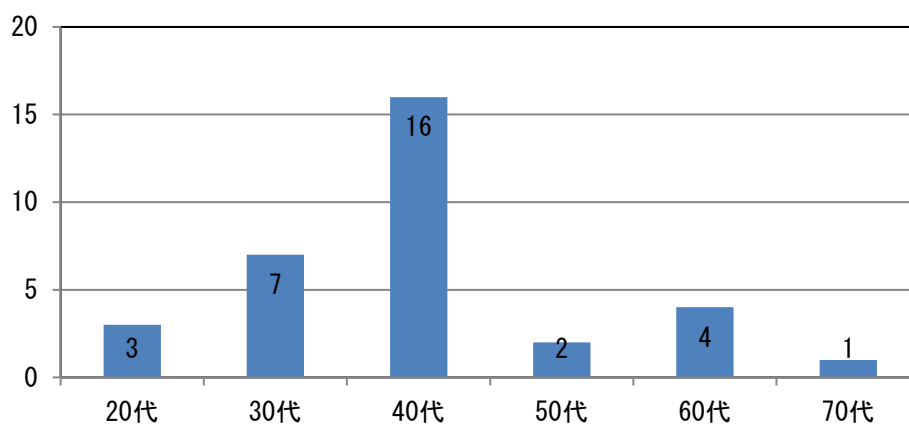


図 5-3 登録引率者の年齢分布

## 6. 自然環境の保全

施策	<ul style="list-style-type: none"><li>○ H23～H24 に、遊歩道沿いの植生調査を実施。</li><li>○ H24 に歩道浸食状況を確認するための定点撮影の手法を確立し、以降毎年実施。</li><li>○ レクチャーにより、植生の保護や外来生物対策の遵守を伝えている。</li></ul>
結果・評価	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 大部分においては変化が見られないといえる。</li><li>○ 一部調査地において、僅かながら植生が後退していると思われる場所もある。利用の影響だとすれば、植生保護期や春先の融雪期の影響が大きいと考えられる。</li><li>○ ゴミのポイ捨てや落書きなどの行為はほとんど見られなくなった。</li></ul>
ポイント	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 植生の後退が懸念される箇所においては、引き続き特に注視する。</li><li>○ 継続的なモニタリングの実施。</li></ul>

植生モニタリング結果（植生後退の兆候が見られる箇所を抽出）

